
On Christmas with you

奈津美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

On Christmas with you

【コード】

N2946D

【作者名】

奈津美

【あらすじ】

組織が無くなった後のお話クリスマス蘭と新一のお話です

12月25日

今日はクリスマス。

街はカップルで埋め尽くされている。

そんな人々を私は正面から見ることはできなかった。

自分は一人だつて認めたくなかつたら。

「らん!!」

「あ、園子」

「聞いて!!真さんが帰つて来てくれるの」

「え!?!良かったじゃない!?!」

「だからね、今日のショッピングは」

「私は良いから、真さんとお幸せに」

作り笑顔。

園子が憎い訳じゃない。

むしろとっても嬉しい。

園子のこんなに嬉しそうな顔、久しぶりだったから。

けど、悲しい。

やっぱり自分は一人だって思い知らされた気がして。

「じゃあね、蘭」

「うん、バイバイ」

今年も一人でデパートに行く。

渡す相手なんかいないのに、プレゼントを买买つつもり。

一番あげたい奴が、一番遠くにいるんだよね。

ねえ、新一。

今、どこにいるの??

「蘭ねえちゃん??」

「あ、コナン君」

「ナン君は、博士と哀ちゃんと一緒にいた。」

「どうしたの??」

「え??」

「泣いてるよ」

「え!??」

気がついたら、目から涙が零れていた。

涙が止まらないや。

どうしていつも私を一人にするの??

たまに帰ってきたら、じゃあなっでどこかに行っちゃっし

私を置いていかないでよ。

「新一兄ちゃんのこと??」

「え、そ、そんなことないよ!!!」

また作り笑い。

ダメ、涙が溢れる。

私はその場に座り込んだ。

人目なんか気にせず泣いていた。

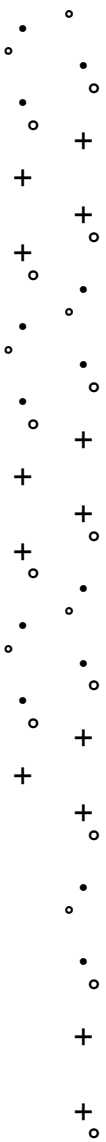
コナン君は私の頭を何度も撫でてくれた。

ゴメンね、ありがとう。

ゴメンね、私が弱くて。

もっと強くないといけないのにね。

待って決めたのにね。



阿笠邸

「灰原、やっぱりあの薬が欲しい」

コナンは頭を下げた。

さっきの蘭を見ていたら元に戻りたいと思ったのだろう。

「言ったでしょ、確かに今回は一度元の姿になれば子供の姿に戻ることは無い」

「ああ、聞いた」

「けど、その確率は20%」

「分かってる」

「分かってない！！あなたは80%の確率で死ぬのよ！？それでも飲むの??」

「俺は、20%にかけたんだ」

哀は返す言葉が無くなった。

薬は完成することができた。

だが、決して完璧なモノでは無かったのだ。

実験用のマウス10匹で実験したところ

2匹は生きていて、8匹は死んだ。

つまり、80%の確率で死んでしまつたということ。

だから、哀はコナンに薬を渡すことを拒んでいた。

決して、コナンを元の姿に戻したくないという訳では無い。

コナンの存在を失いたくないのだ。

「分かって、工藤君」

「灰原??」

「あなたを、殺したくないの・・・これ以上もう人を殺したくないの」

「灰原は悪くない、俺が自分で決めたんだから」

「私が、あなたのことを失いたくないと言ってても??」

「それは」

哀はコナンを見つめた。

「お願いだから、もう無茶をしないで。黒の組織が無くなったから、あなたや周りの人に危害を与えることは無いけど」

「だからこそ戻りたい」

「蘭さんはどうなるの??」

「・・・」

哀はコナンに薬が入ったピンを差し出した。

涙が零れそうだったから、そつぽを向きながら。

「分かったわ、もし・・・あなたが助からなかったら彼女への伝言は???」

「言いたいこと多すぎて分からねえや」

「工藤君・・・」

「じゃあ、こつ伝えて欲しい」

哀はその言葉を聞いて、涙を流した。

今まで我慢していた涙が、零れてしまった。

馬鹿ね。

どうしてあなたはそんなに恥ずかしいことを簡単に言えるの。

。。。。+。。。。+。。。。+。。。。+。。。。+
。。。。+。。。。+。。。。+。。。。+。。。。+
。。。。+。。。。+。。。。+。。。。+。。。。+

ピンポン

誰もいるはずのない家のインターホンを押してみる。

馬鹿だな、私。

毎年毎年こうやって、誰も出ない。

分かってるつもりだけど、分かりたくないんだもん。

『はい??.?』

「え……??.?」

『誰ですか??.?』

間違い無い……この声。

「新一!?.?」

『蘭か??.?ちよつと待ってて、今開けるから』

確かに新一だよな??

私は、持っていた紙袋をギュツと抱きしめた。

新一が帰ってきた。

「蘭」

「新一！！」

私は新一に抱きついた。

「お、おい！！」

「馬鹿！！なんで何にも教えてくれなかったの！？ずっとずっと待ってたんだから！！！！」

「わ、悪い」

「いつつもそう！！新一は何にも言わずに帰ってきて、何にも言わずにどっか行っちゃったの」

新一は蘭をギュツと抱き寄せた。

そして、頭を何度も撫でる。

「ゴメンな、蘭」

「つくしゅん」

蘭は寒さに肩を震わせる。

新一はそんな蘭を家に招きいれた。

蘭は真っ赤な顔してずっと泣いている。

しかも、顔を伏せて。

(どうしよう・・・蘭は泣き止まないし)

新一はもう一度自分の姿を鏡で確認する。

良かった、元の自分だ。

新一は胸を撫で下ろした。

これで・・・言える。

「ずっと、好きだった奴がいるんだ」

「え!?!」

蘭は突然俺がそんなことを言うからびっくりして顔をあげた。

俺は、そんな蘭に微笑みかけた。

「そいつは、小さい頃からすっげえ仲良くてさ・・・すっげえ可愛くて、優しかったな」

「そうなんだ」

「でさ、俺が小学生の時にそいつ体育館の椅子をしまつとこに隠れて出れなくなっちゃって」

「え・・・」

「俺が見つけ出したって訳」

「新一・・・それって」

俺は蘭の言葉を無視して話を続けた。

恥ずかしくて蘭を見ることができない。

「でさ、高校2年生の時・・・トロピカルランドに一緒に行ったんだ」

「・・・」

「で、殺人事件に巻き込まれちゃって大変だったなあ」

「へえ」

「しかもその後、黒ずくめの組織に薬飲まされちゃってさ」

「黒ずくめの組織って・・・この前捕まった」

「で、俺は幼児化しちゃった訳」

「幼児化??」

蘭は首をかしげる。

「で、その幼児化した俺の名前が」

「まさか・・・」

「江戸川コナン」

俺はニッコリ笑って見せた。

蘭はポロポロ涙を零しながら、スツと立ち上がった。

「新・・・」

「俺は江戸川コナンだったんだ、ずっとお前の傍にいた訳」

「何で・・・言ってくれなかったの??」

「悪い、黒ずくめの組織にお前を巻き込みたくなかったんだ」

蘭は顔を真っ赤にして、新一に問いかける。

「で、誰が好きなの??」

「え!??」

「教えてよ」

蘭はニコニコ笑いながら新一の顔を覗き込んだ。

新一は、蘭を抱き寄せて耳元でささやく。

「・・・私も」

新一は蘭をギュッと抱きしめた。

そして、二人はそっとキスをする。

「あ、これ・・・クリスマスプレゼントだよ!!」

「マフラー??」

「うん、今年は寒いから」

新一はポケットから箱を取り出した。

蘭はその箱をまじまじと見つめる。

「・・・新一」

「なんだか分かったみてえだな」

新一はそつと箱を開けてみせる。

蘭はその瞬間また泣き出した。

そして、窓に目をやる。

「見て、雪が降ってる!!」

「俺達のこと祝ってくれてるんだな」

「そうだね」

新一は、蘭の涙をそっと服で拭いてあげた。

そして、左手の薬指にそっとキスをする。

蘭は恥ずかしそうにうつむきながら、ボソッと呟いた。

「もう一回言って欲しいな」

「えっ!?!」

新一は顔を真っ赤にして、アタフタする。

そんな新一を見て、蘭はクスクス笑う。

蘭は、窓を開けて月光に手のひらをかざした。

薬指の輝きがなんとも美しい。

愛してる

これからずっと……

E
N
D

(後書き)

みなさんお久しぶりです。+・(・・)。(・)。(・)。(・)。
奈津美でございますッ

受験生なのでなかなか来れなくてすいません
少し慌てて完成させてしまったので

文章めためたですね(- - ;)

そこらへんは反省します

けど、雰囲気は好きです

宝物、受験が終わったら復活するので

よろしく願います(笑O O*)(+)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2946d/>

On Christmas with you

2010年10月10日06時44分発行